

氏名(本籍)	おかもと りょうすけ (群馬県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第5222号		
学位授与年月日	平成22年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	ポスト世俗化の宗教変容と宗教社会学の再構築 -現代フランスの聖地巡礼についての宗教社会学的研究-		
主査	筑波大学教授	文学博士	山中 弘
副査	筑波大学教授	博士(宗教学)	津城 寛文
副査	筑波大学准教授	Ph.D.	木村 武史
副査	大正大学教授	文学博士	星野 英紀
副査	成蹊大学教授	文学修士	新屋 重彦

論文の内容の要旨

本稿の目的は近代化の趨勢がさらに深まり徹底される時代、つまり近代それ自体の力によって近代が変質される「後期近代」という時代状況が宗教の社会的形態にもたらす影響力を考察し、それを包含できる宗教社会学の理論的視野の構成がいかに可能になるのかを考えることである。本稿では理論的考察と事例研究の双方をとる。理論的アプローチである第1部においては世俗化論の破綻以降の理論的空白を確認し、その上で後期近代化の社会理論を援用しながら、ポスト世俗化の信仰者像を提示する。第2部の事例研究においては、20世紀末からその興隆が指摘されてきたフランスを中心とした西欧の聖地巡礼に注目し、「ツーリズム」や「真正性」といった理論・概念を導入しながら、現代巡礼においては多様な仕方で新しい宗教的共同性が生まれつつあることを明らかにする。

第1章では世俗化論争の再考を行う。初期近代において分化した諸領域が再融合・再統合される過程が見出せる「後期近代の宗教」を考える際には、「世俗化か宗教復興か」という二者択一的な立論を退け、諸領域の中に拡散する流動的なものとして現代宗教を捉え返す必要性を論じる。第2章では、世俗化論の重要な下位命題である宗教の私事化論の理論的再考を行う。従来、私事化は宗教を徹底的に分断し断片化してしまう過程として論じられてきたが、本稿は、世俗化論修正派の議論を参看し、ポスト世俗化の私秘的宗教性が支配的な宗教伝統との連関において構築されることを明らかにし、〈私事化の文脈依存モデル〉を提示する。

第3章では、後期近代における制度宗教・宗教伝統の位相をより具体的に考えるために、フランスの「新人種主義」と呼ばれるイスラーム差別に注目する。新人種主義は文化の共約不可能性を前提とした文化ナショナリズムの一形態である。従来、こうした排外的言説の背景は政治経済的な変動の帰結として説明されてきたが、本稿では「見えない位相」に滞留する「文化宗教」としてのカトリックのあり方にその源由を求める。

第4章では、前章までで明らかになった後期近代社会における制度宗教や宗教伝統の位相と、それらとの連関の下での私的宗教性を分析するために、既存の宗教定義の再検討と批判的再構築を行う。宗教の実体的定義／機能的定義を調停する観点として、本稿では、垂直・縦・横の3つの紐帯を軸とするJ・P・ヴィレムの宗教定義を参照し、ポスト世俗化の主題を〈個人の宗教的自律性によって私事化された宗教性が再び何

らかの共同性を目指す過程〉として定式化する。さらに、Z・バウマンらの後期近代化論とヴィレムの宗教論を接続し、自らの信念体系を他者や他集団との交流の中で再帰的に構築し続ける〈弱い信仰者〉モデルを提出する。

第2部では4つの聖地巡礼を事例としてとり上げ、宗教的共同性のあり方についての比較検討を行い、ポスト世俗化の聖地巡礼を立体的に描き出すことを試みる。第5章では、主に山中弘の宗教ツーリズム論に依拠しながら、後期近代の聖地巡礼を考えるための予備的考察を行う。ポスト世俗化においては信仰者による宗教実践としての聖地巡礼であったとしても、「偽物」として批判される状況が生じている。また、聖地巡礼の空間を、訪問者である「ゲスト」とそこに暮らす「ホスト」、さらに、その場所に埋め込まれていた宗教資源を「見るに値するもの」として脱埋め込み化する「メーカー」の三者の相互作用によって特徴づけられる空間として構築主義的に理解する。

第6章では、奇蹟のメダル教会の巡礼／ツーリズムについて考察する。メダル教会における聖母出現は近代以降の一連の出現の先駆となったのだが、その聖母表象は規範的に彫琢されている。そのため他の聖母表象と比べた場合、きわめて静的なものに留まっており、必ずしも同地への巡礼を動機づけないのである。そして、こうした聖母表象の特徴を踏まえた上で現代の同地への巡礼／ツーリズムを検討し、巡礼者とツーリストの聖地体験が本物／偽物という形で対立しているのではなく、それぞれが異なる回路を通じて固有の真正性へと到達していることを明らかにする。

第7章では、スペインのサンティアゴ巡礼の考察を行う。その際、主に脱カトリック化した巡礼たちが現地地で切り結ぶ「交流」に注目する。ホスト・ゲスト間に特徴的な交流のあり方は、ホストがゲストの欲求に合わせて「ゲストが欲望する巡礼世界」を演出し、それを消費することで巡礼の真正性が調達される。その意味で、ホスト・ゲスト間には〈共犯関係〉が指摘できる。他方、ゲスト・ゲスト間に顕著なのが「連帯」と呼びうるような交流のあり方である。そこでは、巡礼者が互いに「ボランティア的な関わり」をすることに真正性が見出される。

第8章ではテゼ共同体の巡礼について「場所」と「記憶」という観点から考察する。テゼの宗教空間は従来の聖地・巡礼地とは異なる理路にしたがって編成されている。そしてその結果、テゼ巡礼においては巡礼者同士の交流と紐帯の重要性がさらに増している。テゼの礼拝空間は多様なキリスト教表象に固有の解釈を加えずに、それらを動員可能な資源として蓄積する場として捉えることができる。エマヌエル共同体や国際禪協会などテゼと同時期に展開した後発の宗教集団と比較すると、テゼは宗教表象の場所化・記憶化を企図せず、その聖地空間に方向づけを行っていない。そして、テゼにおいて最重要視される「エキュメニズム」や「交わり」という概念は、多様な巡礼者たちを交錯させ、そこから新たな宗教性を立ち上げようとするものとして捉えられるのである。

第9章では現代フランスで展開する新共同体の宗教プログラムにおける聖地の再発見・再構築の過程に光をあてる。新共同体は第2バチカン公会議の決定によって許容されるようになったカトリック制度内の内棲セクト的集団であり、それぞれが固有の霊的淵源を参照しながら様々な運動を展開している。新共同体の聖地巡礼プログラムには、もはや教区教会の礼拝では見かけなくなった若い世代の人々が参加しており、教区教会から新共同体のプログラムへというシフトが指摘できる。しかし、新共同体はメンバーシップと儀礼における流動性を孕んでおり、宗教の利他的消費をさらに加速させる可能性もある。

以上のようなポスト世俗化の宗教性を人間的行為・社会文化的現象として見れば、それは聖なるものが社会的なものへと引き寄せられたこととして理解できる。後期近代社会において他者とつながるためには、自己の継続的変化が要請される受動的・受苦的な仕方では他者と切り結ばなければならず、そうした関係的・相互的な交流の中で、ポスト世俗化の新しい宗教的共同性が織り成されつつあると考えられるのである。

審査の結果の要旨

本論文は、今日のカトリックの聖地巡礼に関わるフィールド・ワークの知見を通じて、後期近代社会における宗教の動態を捉える宗教社会学の理論の新たな構築を企図した野心的な力作である。論文は二部構成になっている。第一部では、近代社会の宗教変動を扱った「世俗化論」の理論的閉塞状況を踏まえて、欧米を中心とした後期近代社会における宗教の社会的動態をいかに理論的に捉えうるかが検討されている。第二部では、具体的な事例として、「奇跡のメダル教会」、テゼ共同体、新共同体、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラなど、フランスを中心としたカトリックの聖地と巡礼を対象に、「巡礼ツーリズム」論的視点から、そこに看取される諸特徴を論究し、著者のいう「ポスト世俗化」における新たな宗教的共同性の出現を明らかにしている。本論文の学問的貢献は次の二点にあるといえる。まず、第一は宗教社会学の理論への貢献である。60年代までの支配的理論であった世俗化論の失墜以降、この領域において理論的な空白が生じていたが、本論は、既存の理論に對置される枠組みとして、「文脈依存モデル」、「弱い信仰者モデル」を提示することで、この研究領域の理論的閉塞状況を乗り越える手がかりを提示した。第二は聖地論、巡礼論への貢献である。この研究領域は、今日の巡礼の高まりを背景として、近年、俄に活況を呈するようになったが、その理論的視座としては60年代のエリアーデやターナーが依然として支配的であり、現代の状況を理解する新たな枠組みが要請されていた。こうした状況に対して、本論は、サンティアゴ巡礼などのフィールド・ワークに基づいて、カトリックの聖地巡礼に看取される特質を明らかにし、その知見をヴィレムの所説と近年のツーリズム論を援用しながら、「私事化された宗教性の再共同化の動き」と捉え、世俗化論と聖地・巡礼論との接続を試みている。

以上のように本論文の成果は高く評価できるものであるが、若干の問題も残されている。まず、著者が提示した「文脈依存モデル」と「弱い信仰者モデル」であるが、これらは、いずれも「宗教の私事化」論を批判的に発展させることを意図して提示されたものだが、両モデルの関係性が十分には明らかになってはいない。また、近年のヨーロッパのカトリックの巡礼に認められる「再共同化」、あるいは著者がヴィレムに依拠して主張する「横の紐帯」から「垂直の紐帯」への志向性の変化が、どの程度一般化できるのかはなお検討の余地があるように思われる。しかし、これらの問題は、著者の本論での優れた学問的貢献をなんら減ずるものではない。本論は宗教社会学の視点から、世俗化論と聖地・巡礼論を理論的に架橋させることで、宗教社会学の新たな理論的再構築に向けて大きく寄与するものであり、この領域における著者の学問的貢献は特筆すべきものがある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。